

## 巻 頭 言

今年の初め頃は、隣国の武漢という都市だけの問題だと思っていた“新型コロナウイルス”感染症問題は、しばらく後には日本でも感染者が見つかるに至った。その時も、問題は武漢からの旅行者に関係する人たちに限られると勝手に考えていた。もう観光客の多い場所には興味のなくなった自分に関わってくる問題とは思えなかった。1月下旬には例年通り学位記授与式の日程の確認が数学事務室と専攻主任の間で交わされ、それが同窓会にも伝えられてきた。この頃は、なお大学行事に影響を与える問題とは看做されてはいなかったであろう。

2月に入り、ダイヤモンド・プリンセス号の乗客・乗員が新型コロナウイルスに感染していたこと、およびそれへの対応が報道で大きく取り上げられ、この問題が否応なく国全体の重大な課題になってきた。3月初め、加藤毅専攻主任より数学同窓会に、3月下旬に予定されていた学部卒業生および修士課程修了生に対する数学教室での学位記授与式中止の打診があった。それは大学本部が全体方針を示すよりかなり前であったように記憶する。当然のことであるが、“同窓会は教室の方針に従う”と応えた。加藤専攻主任の決断は早くかつ明快であった。

やがて大学全体の学位記授与式は中止となり、さらには入学式も実施されないのみならず、講義について本部・学部・教室それぞれが悩みつつ方策を検討した。相当の時間経過の後、オンライン授業によって今年度の講義が始まった。これが教育の中に新しい流れを生み出すことは確かだろうが、大学の授業全部をオンライン授業ですませることが出来るとは思わない。これから学生側も教員側も、長く難しい試みの時期を経ることになるのであろうか。

政府は新型コロナウイルス禍を治めようとし、4月初旬に緊急事態宣言を発出し、効果が挙がったとして5月下旬には全国での解除宣言をした。しかし、コロナ禍は政府の処置を嘲笑うごとくに勢いを盛り返し、何時収束するとも分からない。世界の経済活動は急激に落ち込み、殆どすべての人がコロナ禍に苦しみ、日々喘いでいる。

ここから回復するためには、それぞれの立場において新しい施策が必要であろうが、実施にはその施策の根拠を持った評価が不可欠であろう。このことを考えると、昨年西口氏の講演が思い起こされてくる。また、設立総会での野呂氏の講演も心に浮かんでくる。その一方で、昨年の懇親会で語ってくれた永田ひろみ氏の本誌掲載記事からは、現在の教育制度の問題に加えてコロナ禍による教育現場の大変さが直に伝わってくる。

会員それぞれが、それぞれの立場においてこの困難な時代を乗り越え、新しい社会を作り出そうと苦闘しておられることと思う。私などには想像もつかない苦勞を負って日々働いておられる方々の健康を願うとともに、先が見通せない時代にこそ数学の力が発揮されることと信じ、かつ願っている。

2020年8月20日

会長 井川 満